

●竿先をたたく
小気味いい引き
を楽しむ



とにかく潮が暗くて、
宙層のエサを
マダイに気づいて
もらえなかったね。

◀最後にボトムバンクで
底を狙うところとおり
▼この日は板倉さん以外
の3人がベイトタックル
を使っていた



る。なぜならこの企画の主役は、あくまでもヨッシーだ。ヨッシーが釣ってくれることが、我われ取材班のガチの願いである。とりあえず1枚を釣って極度の緊張感および強い眠気から脱したタカハシゴーではあるが、ヨッシーは彼が底の釣りで成果をあげたのを見ても、相変わらず宙の釣りに徹していた。続けざまに「釣れましたあ!」とニコニコしているのは、トモキである。ハナダイだ。にわかには海の中が活気ついていたと思ったら、空も活気ついている。海鳥たちの大集結だ。「イルカだ!」100頭以上はいると思われるイルカの大群が、弘漁丸の脇をかすめていく。「すげえ!」「写真、写真!」近田編集部長が一眼レフを構える。



▲500グラム前後のマダイがよく釣れた

「マダイも散っちゃうかな」だれともなくそんな声が上がったが仲乗りさんが、「うんや、マダイは下のほうにいつからイルカが出て関係ないよ」と頼もしいことを言ってくれた。イルカの群れはあつという間に行ってしまった。一瞬の盛り上がりと同時に、ヨッシーも魚を掛けていた。しかし、痛恨のバラシ。本命の気配がにわか濃厚になってきた。こうなると、宙の釣りができ

マダイの視界が奪われて 宙層のエサを見つけてもらえない。

イルカで盛り上がった30分ほど後に「あつ……!」と声を上げて合わせたのは、再びタカハシゴーだった。「底で小さなアタリがあった。少し待ってたら反応がなくなっただけ、なんとなく気配がある。聞き合わせみたいに竿先を上げたら、カンツときた。バシッと合わせたよ」

さっきのと同じぐらいのサイズ、本命マダイだ。「追い食いたいな感じだったから、食気はあるのかもしれない。ただ、アタリそのものはあまり多くないよね」

「あ、巻き網船なんだよね」仲乗りさんが、弘漁丸の近く



▲イルカの大群が通過したあと、頻りにアタるようになった